

～織田信長サミット2009に向けて～



小牧山

戦国に馳せる

名古屋市博物館学芸員
鳥居和之

第5回 尾張の中心清須へ

清須入城と一族争い

天文23年(1554年)尾張守護斯波義統が、守護代の織田信友に、清須城内で殺される事件が起き、子の義銀が那古野城の信長を頼ってきました。これに大義名分を得た信長は、翌弘治元年(1555年)、叔父で守山城主の織田信光と謀って、清須城内で信友を討つと、五条川沿いの水陸交通の要地であり、尾張の中心である念願の清須城に居城を移しました。これはなお守護義銀をいただくものとはいえ(のち追放)、大和守系織田氏に代り、弾正忠家の信長が尾張下四郡の支配者になったことを示します。

当時、上総介を名乗っていた信長の器量は、遠く越前朝倉教景にも注目されています。

信長画像(清須総見院)



ただ、支配が確立するには多くの一族内の骨肉の争いが続きます。例えば、信長から那古野城を与えられた信光の不慮の死、代って守山城主となった叔父の信次が、信長の弟秀孝を部下が射殺したことで出奔するなど、背後に信長の手がのびていた可能性が伺えます。

さらに弘治2年(1556年)、信長にとり最大の後ろ楯だった美濃の義父齋藤道三が、長男義龍に長良川畔で敗死するという異変が起きます。前日付で美濃国譲り状をうけていた信長としては、初めて美濃に出兵したのですが、その留守を狙い、尾張上四郡の守護代家岩倉城主織田信安が、近くの下之郷(春日町)を放火したり、腹違いの兄の織田信広まで義龍と謀って、清須城乗っ取りを企てています。

実弟も誘殺

しかし、信秀の後継者として実弟の末盛城主織田信行を担ぐ宿老の林通勝(秀貞)・美作守兄弟や柴田勝家らが、信長の直轄地篠木三郷(春日井市)を押領するに及び、信長は名塚に砦を築き、小田井川(庄内川)を渡って稻生ヶ原(名古屋市西区)



末盛城址(名古屋市千種区)

に出陣、自ら林美作守を討ち取っています。

このときは、母土田御前の詫入れもあり、信長はすべてを許しています。信行が再び岩倉織田氏と結び対決、竜泉寺城を構えるなどの謀反の動きが、稻生ヶ原の戦以来信長に心服していた柴田勝家の通報で露見すると、もう我慢も限界、重病との仮病を装って信行を呼び出し、清須城内で部下に殺害させた信長は、末盛城も傘下に入れ、弘治3年(1557年)11月ようやく相続争いに終止符をうちました。血で血を洗う凄惨な出来事が、清須城で行われたとは、まさに戦国の世でありました。

この時点で信長に対抗する勢力は、岩倉の織田信賢と犬山の織田信清のみとなりました。

問合せ先 文化振興課(☎76 11 89)